

審査の結果の要旨

青山昌文氏が提出した博士（学術）学位申請論文『ディドロ美学・美術論研究』は、18世紀フランスの哲学者ディドロの美学思想に関する研究であり、その芸術理論・美術論・美術批評が、全体として理論的・哲学的に強固で整然とした体系性を有していること、またその体系性が最初期から晩年まで一貫して認められることを証明することをめざしている。さらに、そのディドロ思想を西欧美学史の伝統的な系譜に位置づけたうえで、カント以降の近代美学の地平で覆い隠されてしまった彼の理論の潜在的活力の復権を試みている。

本論文は以下のような全6章構成になっている。まず、第1章「美学における主観主義への傾斜」では、ディドロ思想の背景をなす18世紀フランスの知の状況が、ヴォルテール、ダランベール、モンテスキュー、さらにドイツのバウムガルテンにも触れながら、彼らの思想との対比の下で展望される。

第2章「ディドロの美の哲学」では、初期ディドロがシャーフツペリの著作『真価と徳に関する試論』を自由にフランス語訳しつつそこに付した多くの訳注を手がかりに、関係、機能、さらにその根底に横たわる全存在連鎖としての自然等、以後30年以上にわたるディドロ美学の歩みにおいて揺るぎない基礎をなすことになる諸概念が、浮き彫りにされてゆく。批判されるべき模写の概念と対比的に、ディドロは本質的なものの模倣を顕彰するが、このミメシス論が原初的な形ですでにこの最初期の訳注に現われていることの重要性が指摘される。また『百科全書』の項目美において、カント的な近代美学と鋭く対立する、「美の实在」に全面的に根拠をおく「超＝認識主観的」美学が提示されていることが明らかにされる。

第3章「ディドロの芸術哲学」では、ディドロの執筆した『百科全書』の模倣の項目をはじめいくつかのテキストに焦点を絞つつ、ディドロもまたアリストテレスとまったく同様に、文学、音楽、美術等の全芸術は、その個別的な媒体・手段に相違はあってもすべてミメシス＝模倣という一点において共通しており、芸術の本質は理想的モデルの模倣に存すると論定していることが指摘され、ディドロを古代ギリシャ以来の西欧美学思想史の系譜に位置づける試みが展開される。

第4章「ディドロの芸術理論 最晩年を中心に」はディドロ晩年の『絵画論断章』の分析であり、そこにおいてもこのミメシス理論のさらなる展開と深化が見られることが、批評モデル 統一性 シンメトリーなどの諸観念に触れつつ示されている。

第5章及び第6章は「ディドロの美術批評」に捧げられ、それぞれグルーズとシャルダンという二人の画家に向けられたディドロの言説が分析されている。ディドロに今日的な意味での美術批評の祖を見るのは通説であるが、彼の美術批評の真の意義はまだ十分には明らかにされていないというのが本論文の主張である。たとえば、グルーズに対するディドロの態度はこれまでグルーズの絵の教訓的価値をめぐる単なる道徳主義的な称揚にすぎないものとして軽んじられる向きがあったが、本論文ではそれを 強度の美学 ないし エネルギーの美学 の上に立つ美術批評として読み直し、斬新な再評価を試みている。

しかし、ディドロが『1767年美術展覧会批評』でもっとも高く評価している画家は、言うまでもなくシャルダンである。一における多の再現としてのディドロの美学思想は、このシャルダン論においても根本的な基盤をなしている。ディドロによれば、シャルダンの絵における色彩は世界内の相互的な連鎖を表わすものであり、一つの絵画的世界の内なる存在は、他のすべての存在から光の反射を受け、同時にその受けた光を反射してもいる。ディドロは、

自然における全存在の連鎖というモナド論的「世界模倣論」の上に立って、芸術作品から聞こえてくる「世界の内なる声」を、言葉による批評文へとさらに「ミメシスする」ことを為し遂げ、それによって世界内在的にして作品内在的な美術批評を西欧において初めて創始した、というのが青山氏の主張であり、本論文全体の結論にもなっている。

ディドロの文章は、知性のあまりに生き生きとした活動がそのまま転写されている結果、飛躍が多くしばしば論弁の筋道が辿りにくい。また一気に対象と同一化したり、視点が自在に転移してゆくために、一貫性がないかのように受け取られることも多い。本論文で青山氏は、文学としては面白いかもしれないが哲学ではないと言われるがちであったディドロの文業を細密に読み抜いて、初期から最後期まで一貫する美学理論の枠組みを引き出してみせている。これが本論文の学問的貢献として第一に挙げるべき点であろう。

また、そのような強固な体系として提示されたディドロの美学・芸術理論・美術論・美術批評が、一方で、プラトン・アリストテレスによって代表されるヨーロッパの古典的美学・芸術理論の伝統を正統に受け継ぎ、それを深く踏まえたとうえで提起されたミメシス理論であるという点、しかし他方でまた、カント以降の主観主義的な近代美学と根本的に異なるものであるという点を、二つともども明快に剔抉している。ディドロの美学をカントに至る前段階と捉え、カントによってディドロが乗り越えられたとする、もともとはドイツ人の哲学史家が唱えはじめ、今でもフランス人の間でさえかなり流布している見解を批判して、ディドロ美学の美学史における位置とその意義の正当な評価を提示していることが、本論文の大きな価値であることは疑いを容れない。

近代の立場からディドロを見れば矛盾・混乱と見えるものも、実は矛盾でも混乱でもなく、そこに統一的な体系性が貫徹していることを、青山氏はテキストの字句に即しつつきわめて説得的に証明している。またそうしたディドロ思想が、近代的な「特権的主体」や「偉大な創造的主観性」の神話の乗り越えのために、さらに言えば、近代 それ自体の乗り越えのために、一つの有効な拠点を提供しており、たとえばクリストのような現代のアーティストの仕事を理解するうえで有用な理論たりうるという点を明らかにしたこともまた、本論文の大きな成果であろう。

本審査委員会は、慎重審議の結果、従来ディドロ論の不当性を糾弾しようとするあまり論述がポレミックになりすぎている点、断罪の対象としての「近代」の概念が一面的にすぎるといふ点、演劇や音楽といった美術以外の芸術ジャンルへの言及がない点など、いくつかの不満はあるものの、前述の種々の学問的価値に比べればそれらは小さな瑕疵にすぎないと判断し、青山昌文氏による本論文『ディドロ美学・美術論研究』を、博士（学術）にふさわしいものであるとの結論を得た。